

はしのかき

竹森浩佐一

前から、わたしは、回中克己さんに、信仰の詩を書いていただきました。と頼んでいただきました。いつか、そのことを申しましたら、回中さんは、詩篇があるのに自分などは、どのわけました。そのうちに、笹渕友一さんといっしょに、ドイツの讚美歌を、いくつか翻訳して下さりました。それは、今も、教会で用いられています。

キリスト教の信仰を、詩で書いた方は、何人かおられましてしようが、回中さんのような本格的な詩人が、お書きになるのは、はじめのことではないうか。回中さんは、そういう詩を、雑誌に発表なさったことかあるので、いつかは、詩集が生まれるにちがいない、と期待しておりましたか、それが、今度実現して、誠にいいこととてあります。

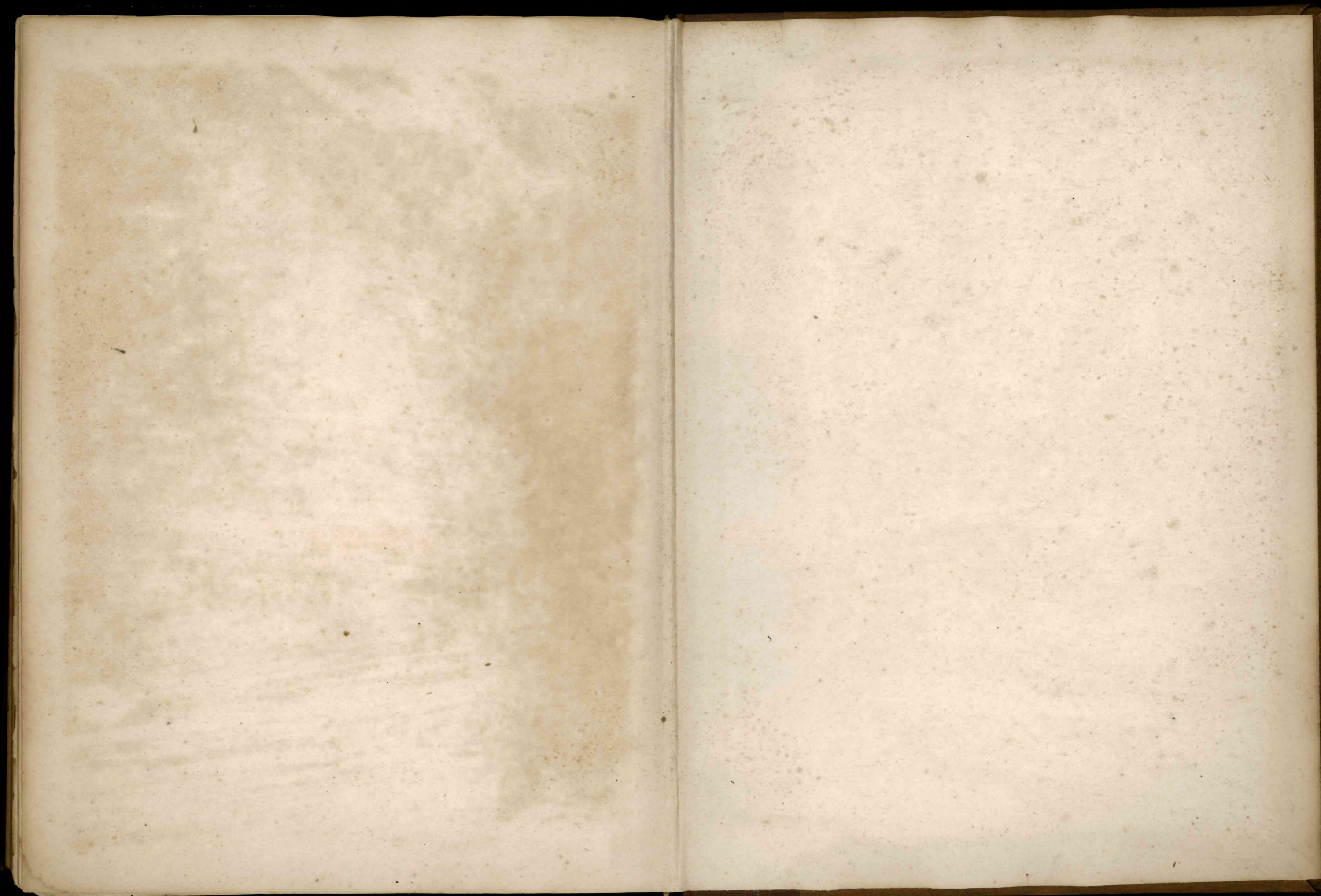
キリスト教の信仰の中心は、キリストによつて、罪のゆるしを授けられたこととてあります。

二つをびも、田中さんがお拳打に打った本の
 題の中に、罪の中しー加あつたことは、
 七五〇のりことでした。申すまでもなく、これ
 は、パウロから、宗教改革者へと、教会が受
 け継いでいよつてあります。わたくしは、自
 分の説教で、このこと以外のこととを語ったこ
 とがなかつた。

もういひとつ、わたくしは、年来、強調してき
 たことは、礼拝ということでした。神を拜か
 るというところが、宗教生活の中心であること

は、たれにても分りのことです。しか
 し、それを形にあうわし、実際の生活にう
 ことば、そんなには容易なことではありませ
 ぬ。詩人の教養な魂をもつておられ、田中さん
 は、そのことと、信仰にあつて、よく交りし
 表現されたにちがひない、と思つてあり
 ます。

次の機会には、たれでも加教之のうに、
 讃美歌を、沢山書いていねをきこひ、と思つ
 ております。



自選自筆 一九八三年

詩歌集

神聖的約束

田中克己

詩歌集

神聖的約束

とこしへに女れ死なせいの
御約束われは信じて年老
いたれば

四月八日作



主の祈り

われしは眼をまへ又ぞこの祈りをする

最後までそらむいえるようになったのは

入信前われしの借りそいふ家の娘

— かれしの末の子の女たうたうた —

その子が瀕死の見舞として帰宅し

その子が死ぬところになってやうとそらむいえるようになった

1 国と力と栄えとは限りなく

汝のものをわればなりし 水の終りの一句である

われしはそらむまよふとそらむいと眼を赤い

悪い癖と笑う人は笑うかい

われしはこゝとそらむいと眼を赤い

(昭和五八年四月八日作)

605 (詩篇第23篇)

スコットランド讃美歌
田中克己訳

主はわががいぬしとぼしきなし
まことになれにはとぼしきなしア

- 一、主はわががいぬしとぼしきなし
まことにわれにはとほしきなし
- 二、主はわれいこえとみどりの野の
しづけき河辺にみちびきたもう
- 三、主はわがたまをばよみがえらせ
みさかえのためみちびきたもう
- 四、死の谷あゆむもわざわいなし
主ともいましてなぐさめます
- 五、主はうたげひらきあだのまえに
かみにあぶらぬりさかつきたもう
- 六、生くる日のかぎりみいつくしみ
みめぐみみちたりとこよに住む

603

ドイツ讃美歌
田中克己訳

うたもて主をばほめたたえよ
うたもてすくいつねにうけな
なやみはてなかくかさなれども
ぞみたたざれ主すくい---たもうア

- 一、うたもて主をばほめたえよ
うたもて救いなくかきなれども
- 二、主のみことばに主すくい
のぞみよなむはげみたなん
- 三、あざける敵は主がすくい
みちかいてはもてほろぼしたもう
- 四、おのが子見すて愛もたざる
母はこの世にひとりもなし
- 五、たの十字架にすいてさるとも
主を信ずればいとわりはなし
- 六、主はなぐさめにうけたまわん
身もそのままとよろこびとを
- 七、主はより解きてあたまえたまわん
罪しめるときにのみまえに
- 八、主はなぐさめにうけたまわん
苦しみあつたり主のみまえに
- 九、主はなぐさめにうけたまわん
ともにあつたり主のみまえに
- 十、主はなぐさめにうけたまわん
受くるものにはみめぐみあり
- 十一、主はなぐさめにうけたまわん
主をほめたえんみめぐみあり
- 十二、主はなぐさめにうけたまわん
愛と和のなかにみめぐみあり
- 十三、主はなぐさめにうけたまわん
すべます永遠にみめぐみあり

下九ノ書

信仰の証人

古つかしいことばを使わずに

鳥や花を作りたもうた神と

その可愛さや美しさをほめたえよう

理由はいらぬい 好きだからである

(蛇ぢけはわらひは好きない 本能的にわらひである)

好きだから好きなのぢ

神は四季をうえ花々を造りたもうた

神はほむべきなる (八月一日)

歌集から (受洗二十年)

光満つまうまれましし暗き世に明るき花あ

れし夜よ

空に星地に光をうけし声をあげてみよはも

生まれまししか

もつし光をしかくひて死にしいにしへの詩人をか

か恋するわれは

二十年 一夜といわれは祈れどもみは日になら

ここのサ多き

キリスト者われをば恥づる日の多き二十年をば

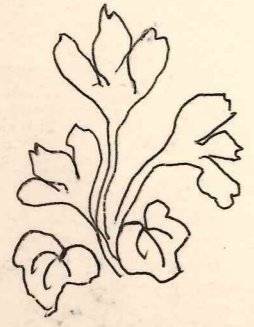
すぢしきたりし

いまいくとせこの世に生くるわれなるかたひかみなへは年

年なりき

へいしへんがリラヤの湖われは見すこの世を終へむ

サ国にゆきて



下北

竹本林トヨ先生

み名はまがさくられおどはるかき神の
み国に召されし人よ (四月十一日)

スマトラ

シヤロムとユダヤはいふしスマトラとスマ
トラはといひしことばよ

ペンテコステ

くしくくきりておたり姉妹中この人
となりけらしむ

ことばなる一つとなりし日は今日おわれソング
不語ヨ果にはげめる

わが甘きしや

この身の苦辛を語りしことば

そのやを嘆む皮肉にとられるから

まじしくきらわゆる園である

／＼かしくんと静かき幸福

書翰と愛との恵まれて

少女しはおもむくの老いてゆく

若いの日の頃の愛と強い憎しめとは

ともしも消えさつて

うたはけまきわかれである。

心かかれしを園らせる物事かまあるが

今いかに儲えしせるなるう

少くともわかしは感じるくるなるう

その日はいつかわかしは手足かつかぬか

もう近いつかをわかしは感じてゐる

それまむの幸福を後継りする

(八月二十日)
詩人学校 三八六

わかしはあしやへりに生まれついで

この秘密を守りし一番の苦しさだ。

一九一一年

に寒き日を 駆けつつ着きし 教会の 日取前席
のやうと 坐りぬ (十二月二十一日)

おめくみたまに 満ちし 栄光を見る日こそ此
クリスマスなれ

世のはじめ ありし ロゴスは 栄光に かつ 肉体となりに
ゆるとよ

ロゴスとは 神の 知識 恵を 与へり 此れが 身近と
なりし 二の 日ぞ

おろかるる 老いし 母をば キリストス 信する 者と ますす
ハなきが

大可蹟 待つ 裏に せしごとく せられ 伏して アーメン と 呼ば 老

いし 二の 母

神の 子 女 ぐみ まことの 三つ を 見る 聖誕祭の よろこ
びを 祝ぐ

(受洗記念)

一九七二年

是るを知り 何もまた不に 信仰の 福を 是れは 代り

よへらしものい 満ち 是り 祝福を受くるに まする 利益

はあらず

わか物と思ふも うれし 教へあが 祝福 そのめも と思へ

幸西の年々 未だ 革命はあらずと われは 信いを けり

雅子^{まさ}はわ かの 孫の名ぞ 同じ 多の 木曾の せと けり ますきくあ

一九七二年

わがしの 詩

昭和十八年八月に 島崎藤村が なくなつた

その月二十五日には 次男 祥が 疫癘で なくなつた

わたしは 泣いて 泣いて 笑かなく なつた

もう 歌など 歌わなく なつた

二十五年間 わたしは 方々 ころころ して

胃は まの 腹り ずん 置いて ありが

このころ わたしは 声を立てて 笑う

高き かな 讚美歌を うたう

詩も 時々 作り たく なる

主を ほめた ぬえる 詩を

一九七二年

このころの 詩

ほろに 近づくと

人々は いろいろ なことを する

詩も 同じこと

石竹の のはりに 汚れたを

ハラの 代りに 推草を うたう

恥しうすの 集まつて

お互ひの ほめあひ

詩壇 という 境界が あつて

わたしは そこから 追放された

それではお返しは詩を作
ほめうたを作る
感謝のうたを作る

一九七七年

讃歌

主はほむべきかた

野に若草が甘みえて出て

枯木枝に芽がふくらみ

日よけの草がふかくなり

可憐い新入生が、希望と期待とで登校して来る

そのふらふらした

五十歩を越えぬクリスマスは洗礼を施されて

コリントは入り目々の試練を受けつゝ
外患を信じてこゝにいって水をうけこえる

主をほめまつる

その試練を賜え

その信仰を鍛えられながら

さらに堅いものとなすために

復活祭のあと

(信じての友に一九七七年)

主のふたのえりまうらと

ルターの生 其れはドイツはまか冬で

かいてらはイタリヤにゆく

そのいはドイツ語の五月(ミラノ)かきり

花が咲く鳥が歌っている

(ドイツでは太陽暦五月はやつとスズクヤ万花の咲くとき)
かきりての国が非心して

主雨 復話したまうたか
冬は子が残っていて
梅雨のころ追つてくる
五月は 天のしくき月けいね

かたしなりの 園土にたまふ 季節 (信徒の友より)

中島栄次郎

もう此のころ 去らぬ
よの詩論を書き
よの詩を説いた
人柄かよくて 誰からもまらぬ
ゆふ乙種と二度の即日帰郷の事
二三夜目ゆふりこゆき
マニラ のう 園土宛の 便り
一度ふし

わたしには 結婚も召集も 告げもなかった
頼みかて 検した 遺稿はノートだけで
アッシャーのことはなかりだ
遺書には 戦死後の再婚自由しを書いた
園土宛の 母上からたのまね
伊東静雄や坪井明は 本気で相手を控えたが
到頭成功しなかつた
わたしは 残した 本の整理をたのまね
今 名古屋大学に 折口学書が
京都山学院 鉦大に 文学書が 置いてある
目録の 彼の追憶した詩は
甘棘沢 桓夫 先輩に ほめられた
彼が 因田折口学 論文は 残らずに 去らぬ

秋原 翔太郎

上州の詩人といわれるが

父祖の墓は河内国木之本で

赤蔵 ドクタイは溺愛し

上州出身の母はまがしがつた

極端なる恐怖症のかり

わなしの手を握りぬて新宿の大通を横切つた

その日は酒屋かすり仲居が彼の旦那後の悪人だった

醜い大女でどこもぬいところがなく

彼は好意をもつていやかつたと思ふ

シシがオールドで死まの無電をまいたとき

かなしは三十歳ではるかに具福をたつた

のちの神憑りのなる廿頭人だ

彼の詩集を手いして苦痛の表情をし

地獄の墜ちていと伝えたとき

浅野 晃・林 徳馬とかなしは色を失ふた

かなしは入信のち彼が淨罪身で

改信の罪を許されることを祈っている

ニースでは五十七歳であつたが

彼は五十五歳と称し

出会う女たちを必ず注目し

師白秋とこわかつた

師も昭和一七年の末逝去し

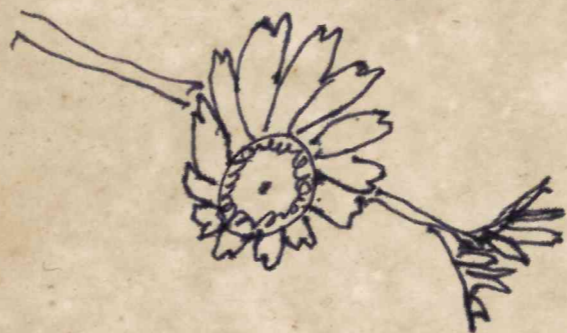
その死は多く唱歌として残っている

過失を父も許せかし

過失を人も許せかし とつて絶望は

かなしは父なる神にその子と子の神のみ名をも

彼のために祈っている



一九八三年 月 日

(非賣品)

著者

田中克己

表紙書画

田中克己

東京都杉並区阿佐谷

南一四〇一八

電話 (03) 341-7833